中高校生時代のどのような生活経験が大学生の職業観に影響するのか*

Life Experiences and “Shokugyo-kan” in Undergraduates

浦　上　昌　則

Masanori URAKAMI

要　約

本研究は，職業観を経済的側面，個人的側面，社会的側面を持つ職業に対する重要性の認識ととらえ，大学生の職業観と中学・高校時代の生活経験の関連を検討することを目的とした。大学生 1137 名からの回答を対象として分析を行った結果，職業観と生活経験の間には弱い関連があり，多様な経験をしている者ほど，特に個人的側面や社会的側面に重要性を認める程度が高くなることが示された。しかしながら，特定の経験，もしくは特定の経験パターンと職業観の納得できる関連を見出すことは難しく，職業観の形成を経験主義，また行動主義的な学習論で説明することの困難さが明らかになった。これを受け，構成主義的な観点の導入の可能性についても言及した。

問題と目的

職業選択は青年期の大きな課題である。職業観は職業選択の際の重要な判断基準として取り上げられ，以前より検討されてきた。しかし職業観という概念については，以前から多義性やあいまいさも指摘されている（たとえば広井，1962；梅澤，2008；浦上，2010 など）。そこで浦上（2015）は，尾高（1941）による職業の定義を用いて大学生の職業観を把握することを試みた。本研究では，そのようにして把握された職業観が，それ以前のどのような生活経験と関連するのかを探究する。

本研究でいう職業観は，浦上（2015）に準拠する。すなわち職業観とは，職業の持つ経済的側面，個人的側面，社会的側面に対する重要性の認識（価値観）のことである。これは尾高（1941）による職業の定義に着目して定義されたものである。尾高は，（1）経済的側面：勤労の代償として生活のための収入を得る，（2）個人的側面：（適材適所の考え方により）個性をいかし社会に寄与する，

＊本研究は，杉原佳奈，安井彩乃両氏との連名で，日本心理学会第 77 回大会で発表した調査データ（杉原・浦上・安井，2013）を再分析したものである。

(3) 社会的側面：社会の構成員として，分担する役割を果たすという 3 つの要素を含んだ継続的な行動と職業を定義した。この尾高の指摘する職業の 3 側面それぞれに対する重要性の認識が職業観である。このように，職業観は，個人が職業という概念をどのように定位しているかということを代表するものといえる。

またキャリアや職業に関する問題の指摘は多いが，その背景には，職業という概念や，それと不可分な関係にある社会や個人といった概念の理解に課題があるのではないかと指摘される（梅澤，2008；浦上, 2008, 2010 など）。そこで浦上(2015)は，職業不決断と職業観の関連について検討し,「生計を立てるため」とのみ職業を認識することは，職業の選択を困難にするかもしれないなどと指摘している。このように職業観はキャリア研究においても重視されるべき要因といえる。

職業観はもちろん，キャリアに関する多様な意識については，個人の様々な経験から形成されていることは疑いのないことであろう。たとえばキャリア教育において職場体験やインターンシップが推進されているが，それを推進する背景には「経験からキャリアに関係する何かを学び取ることができる」という了解があるためと考えられる。またそのような支援を支える理論のレベルにおいても，多くのキャリア理論で経験や経験を促進する環境が重要な要素として組み込まれている。たとえば Krumboltz によるキャリア選択に対する社会的学習理論（Krumboltz, Mitchell, & Jones, 1976 など）のように社会的学習理論を援用した理論はもちろん，Holland の理論においても個人の興味の発達に対して環境，経験が影響を与えると位置づけられている（Holland, 1985 など）。

では，職業観，すなわち職業の持つ 3 側面に対する重要性の認識はいかなる経験によってどのようなものが形成されるのであろうか。残念ながらこの問いに対する回答に寄与する先行研究はほとんどない。確かに，職業概念の形成に関しては山下・道脇（1973）などが，また職業観の形成に関しては多くの関連研究がある。しかし，自明視されているためか職業，職業観の定義がなされていない研究は多く, また定義がなされていても本研究でいう職業観とは異なるものがほとんどである。加えて尾高（1941）は「職業」という日本語の概念について言及しており, 海外の類似した概念（言葉）の定義を翻訳，紹介したものではない。それゆえ，海外の関連する研究，たとえば work value などの働くことに関する価値観研究からも示唆を得ることは難しい。

そこで，あらためて日本人が「職業」という言葉やその関連概念をどのように獲得しているのかを考えてみたい。職業は広く利用されている言葉なので，辞書等の記載内容を参照し，それを知識として獲得するようなものではないだろう。様々な情報源となりうるもの，たとえば親をはじめとする身近な大人の会話やニュース等のメディア上の情報などを見聞きするといった日常生活の中で，徐々に形成されていくものと一般的には考えられよう。また，進路指導・キャリア教育に代表される学校教育の影響もあるだろう。職業指導から進路指導，キャリア教育と歴史的に呼称の変遷はあるものの，学校教育において職業を含む生き方については従前より重要な位置を与えられてきた。そして職業観, 職業的自立といった表現が用いられ現在でもいっそう積極的に推進されている。それゆえ，こういった学校教育での経験が職業に関する様々なことの学習につながっていると考えられる。またアルバイトやボランティアといった直接的な社会参加の経験なども一因と考えられよう。

以上のような推測は一般的なものであり，妥当な推測ともいえるだろうが，はたしてそうなのであろうか。特に本研究では職業観を職業の持つ 3 側面に対する重要性の認識ととらえている。たとえば経済的側面の重要性はアルバイトなどの経験からそれを重要だと思うようになるという推測は可能であろう。しかし，社会的側面，すなわち社会の構成員として職業を通して何らかの社会的

役割を担うことの重要性に対する認識に関わるような経験とはどのようなものが考えられるだろうか。ここには，それに影響しうる，ある特定の経験があると仮定することは難しいといえるだろう。むしろいくつかの経験の複合体の影響を想定することが適切かもしれない。本研究では，この経験の複合体，すなわち，多様な経験の多少によって特徴づけられる経験パターンに注目したい。

以上のような推測から，職業観と経験の関連について，職業観 3 側面のうち，経済的側面はアルバイト等の経験との関連が認められ，他の 2 側面は明確な関連性が認められないと考えられる。しかしながら，経験における特徴によって対象を分類すれば，そこには職業観との対応関係が見えてくるのではないだろうか。これはあくまでも推測の域を出ないものであるため，本研究では，大学生を対象として，中高校生時代の経験の様相を把握し，職業観との関連を探索することを目的とする。

方法

調査時期および対象

東海，関西地方にある 7 つの大学で，学部生を対象に 2010 年 5 月から 7 月にかけて調査を実施した。授業等において質問紙を配布し，説明と協力の依頼を行い，その場もしくは後日に回収を行った。なお質問紙は無記名であり，調査への協力は任意であった。なお，この調査に関しては浦上（2015）が報告しているが，本研究では，そこでは分析されなかった内容を報告するものである。

調査内容

職業観　尾高（1941）に従い，経済的側面，個人的側面，社会的側面のそれぞれに対して 2 項目を準備した。経済的側面については，「私にとって職業は，私の望む生活をするために必要なお金を得るために重要である」と「私にとって職業は，生計を立てるために重要である」，個人的側面については「私にとって職業は，私の持っている力を発揮する場として重要である」「私にとって職業は，自分の知識や技能を活用できる場所として重要である」，社会的側面については，「私にとって職業は，社会の一員として自分の役割を果たすために重要である」，「私にとって職業は，社会に貢献する手段として重要である」という項目を準備した。これら 6 項目に加え，「私にとって職業は，自分を成長させるために重要である」など 6 つのダミー項目を加えた 12 項目を用い，「まったくそうは思わない」「少しはそう思う」「わりとそう思う」「かなりそう思う」「強くそう思う」までの 5 段階で回答を求めた。浦上（2015）では，それぞれの側面を構成する 2 項目の相関係数は .642 から .700，また他側面の項目との相関係数は高くても .4 台であったことから，2 項目の合計得点をそれぞれの側面の指標としている。今回もそれにならって得点を算出する。

生活経験　主として，中学生，高校生の時期における生活経験をたずねた。その内容に関しては，進路や就職，生き方に影響を与えているのではないかと一般的に推測されるであろうものを，中学や高校で実施されている進路指導やキャリア教育の内容等も踏まえて，アプリオリに項目化した。「あなたは，中学・高校生の時にボランティア活動にどの程度参加しましたか」「あなたは，中学・高校での進路指導・キャリア教育などで，将来の生き方や職業などについて，どの程度考える機会を与えられたと感じていますか」など 10 項目を準備した。回答は質問項目によって異なるが，3 から 5 段階で求めた（詳細は Table 2 を参照）。

属性等　回答者の属性に関して，学部・学科，学年，性別，年齢について回答を求めた。

なお，本研究の分析にはR（3.0.2）および各種パッケージを用いた。

結果

調査対象の属性と生活経験

分析には，就職の内定先を得ていない者の回答で，職業観，生活経験の項目に対して欠損値のないもののみを用いる。年齢は18歳から26歳までの回答者を分析対象とした。このような条件に合う回答は1137名分であった（男性463名，女性674名）。これは欠損値の関係上，浦上（2015）から1名が減じられたデータである。対象の学年，所属等の概略をTable 1に示す。なお，表中の「文系」には，人文学，社会学系などの学部・学科が含まれ。「理系」には理学，工学，情報系などの学部・学科が含まれる。また特定の職業との関連が強い，教員養成を主とした「教育」，「看護」については，文理系とは別に示した。

次に生活経験について，回答カテゴリごとの回答数を整理した。回答比率と合わせてTable 2（nの欄参照）に示す。

・ボランティア活動

「あなたは，中学・高校生の時にボランティア活動にどの程度参加しましたか」という設問に関しては，そのほとんど（約92%）が，「参加したことはない」もしくは「数回は参加した」と回答しており，「かなり参加していた」「日常的に参加していた」という回答者は非常に少ない。ボランティアを通した社会参加経験は全体的に少ないといえるだろう。

・進路指導・キャリア教育

「あなたは，中学・高校での進路指導・キャリア教育などで，将来の生き方や職業などについて，どの程度考える機会を与えられたと感じていますか」という設問においては，「少しは与えられた」と回答する者が半数を超えており，これと「かなり与えられた」と回答する者がほとんどである（合計で約89%）。また「とても与えられた」と回答する者も6%程度みられるが，「まったく与えられなかった」と評価している者も5%程度存在する。進路指導やキャリア教育をまったく実施していない中学，高校はないであろうが，これまでの進路指導やキャリア教育についての学習経験をこのようにとらえている者も一部にあることは留意に値しよう。

Table 1　回答者の属性

		性別		学年			
所属・専攻	人数	男	女	1年	2年	3年	4年
文系	648	217	431	312	227	63	46
理系	240	185	55	49	164	10	17
看護	92	0	92	92	0	0	0
教育	157	61	96	58	0	95	4
合計	1137	463	674	511	391	168	67

Table 2　生活経験に関する度数分布等の各種統計量

あなたは，中学・高校生の時にボランティア活動にどの程度参加しましたか。

	1. 参加したことはない	2. 数回は参加した	3. かなり参加していた	4. 日常的に参加していた	F値	多重比較	ポリシリアル相関係数
経済的	8.18(1.80)	8.00(1.73)	7.94(1.71)	7.92(2.06)	1.05		−.058
個人的	6.77(1.98)	7.02(1.85)	7.55(2.10)	6.85(2.27)	3.38＊	3＞1	.100
社会的	6.29(2.13)	6.69(2.04)	6.99(2.07)	6.31(2.72)	4.11＊	3＞1, 2＞1	.105
n	402(35.3)	645(56.7)	77(6.8)	13(1.1)			

あなたは，中学・高校での進路指導・キャリア教育などで，将来の生き方や職業などについて，どの程度考える機会を与えられたと感じていますか。

	1. まったく与えられなかった	2. 少しは与えられた	3. かなり与えられた	4. とても与えられた			
経済的	8.43(1.79)	8.10(1.69)	7.98(1.81)	7.77(2.02)	1.60		−.075
個人的	6.64(2.30)	6.80(1.88)	7.20(1.89)	7.59(1.96)	6.25＊＊	4＞1, 4＞2, 3＞2	.144
社会的	6.04(2.26)	6.34(2.04)	6.88(2.05)	7.48(2.25)	10.30＊＊	4＞1, 4＞2, 3＞1, 3＞2	.190
n	53(4.7)	658(57.8)	353(31.0)	73(6.4)			

あなたは，中学・高校生の時に職場体験学習などで実際の職場に出向いた経験がありますか。あれば，すべて合計すると何日くらい行きましたか。

	1. 経験はない	2. 1日くらい	3. 2･3日くらい	4. 4･5日くらい	5. 6日以上			
経済的	8.06(1.88)	8.12(1.77)	7.99(1.81)	8.11(1.54)	8.18(1.69)	0.42		.007
個人的	6.88(1.99)	6.62(2.03)	7.00(1.89)	7.16(1.88)	7.32(1.77)	3.15＊	4＞2, 5＞2	.090
社会的	6.54(2.14)	6.38(2.15)	6.43(2.01)	6.90(2.16)	6.99(2.02)	3.10＊		.079
n	156(13.7)	217(19.1)	470(41.3)	203(17.8)	91(8.0)			

あなたは，高校生の時にアルバイトをした経験がありますか。（なお，「長期」とは１ヶ月程度を目安とします）

	1. 経験はない	2. 長期にわたって続けたことはないが，何回かはした	3. 何回か，長期にわたってした	4. 日常的にしていた			
経済的	8.04(1.75)	8.15(1.70)	7.88(2.00)	8.29(1.63)	1.12		.024
個人的	6.92(1.93)	6.95(1.87)	7.11(2.02)	7.21(1.90)	0.82		.057
社会的	6.50(2.06)	6.95(2.19)	6.60(2.17)	6.42(2.12)	1.95		.017
n	783(68.8)	155(13.6)	107(9.4)	92(8.1)			

あなたは，中学・高校生の時に家の手伝い（家事や家業の手伝い）をどれくらいしていましたか。

	1. ほとんどしなかった	2. たまに，頼まればしていた	3. 週に何日かはしていた	4. ほとんど毎日していた			
経済的	8.25(1.77)	8.07(1.70)	8.00(1.80)	7.93(1.89)	0.90		−.054
個人的	6.55(2.05)	6.97(1.90)	7.04(1.89)	7.21(1.93)	2.93＊	4＞1	.089
社会的	6.06(2.11)	6.57(2.04)	6.64(2.14)	6.88(2.13)	3.92＊＊	2＞1, 3＞1, 4＞1	.101
n	141(12.4)	582(51.1)	259(22.8)	155(13.6)			

（Table 2　続き）

あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人が職業や仕事について話をしているのを耳にしましたか。

	1. ほとんど耳にしたことがない	2. たまに，耳にした	3. よく耳にしていた	4. 毎日のように耳にしていた			
経済的	7.79(2.08)	8.13(1.68)	8.09(1.70)	7.94(1.90)	1.12		.002
個人的	6.58(2.08)	6.73(1.84)	7.19(1.90)	7.39(2.03)	7.94**	3>1, 4>1, 3>2, 4>2	.151
社会的	6.09(2.15)	6.43(1.98)	6.67(2.07)	7.07(2.36)	5.13**	3>1, 4>1, 4>2	.132
n	110(9.7)	469(41.2)	409(35.9)	149(13.1)			

あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人から，職業や仕事の意味や意義について聞かされたことがありますか。

	1. 聞かされた記憶はない	2. 聞かされたような気がするが，はっきりとは覚えていない	3. たまに聞かされた	4. よく聞かされた			
経済的	8.11(1.81)	7.89(1.71)	8.12(1.74)	8.41(1.76)	2.31		.030
個人的	6.52(2.11)	6.88(1.74)	7.47(1.77)	7.30(2.05)	15.03**	2>1, 3>1, 4>1, 3>2	.202
社会的	6.08(2.16)	6.59(1.96)	7.01(2.00)	6.86(2.39)	11.86**	2>1, 3>1, 4>1, 3>2	.180
n	357(31.4)	374(32.9)	337(29.6)	69(6.1)			

あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人から，人の生き方や人生について聞かされたことがありますか。

	1. 聞かされた記憶はない	2. 聞かされたような気がするが，はっきりとは覚えていない	3. たまに聞かされた	4. よく聞かされた			
経済的	8.03(1.86)	7.98(1.71)	8.09(1.67)	8.30(1.85)	0.97		.041
個人的	6.59(1.91)	6.90(1.91)	7.21(1.86)	7.41(2.04)	8.11**	3>1, 4>1	.157
社会的	6.08(2.13)	6.59(2.05)	6.77(2.01)	7.14(2.17)	9.28**	2>1, 3>1, 4>1	.167
n	311(27.3)	346(30.4)	362(31.8)	118(10.4)			

あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人が働いている姿（家事などではなく職業に関連して働いている姿）を目にしていましたか。

	1. 見たことはなかった	2. たまに見ることがあった	3. 日常的に見ていた			
経済的	8.11(1.75)	7.99(1.76)	8.10(1.75)	0.61		−.012
個人的	6.71(1.94)	6.99(1.88)	7.37(1.95)	8.26**	3>1, 3>2	.135
社会的	6.31(2.13)	6.61(2.04)	6.92(2.10)	6.13**	3>1	.118
n	402(35.3)	510(44.8)	225(19.8)			

あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人は，あなたの進路に対する希望や要望を口にしていましたか。

	1. 言われたことはない	2. 少しだけ言われた	3. かなり言われた	4. とても強く言われた			
経済的	7.85(1.87)	8.06(1.73)	8.14(1.74)	8.47(1.58)	2.81*	4>1	.088
個人的	6.94(1.81)	6.90(1.94)	7.09(1.94)	7.29(2.14)	1.12		.050
社会的	6.47(2.06)	6.51(2.08)	6.77(2.07)	6.80(2.39)	1.21		.057
n	255(22.4)	604(53.1)	203(17.8)	75(6.6)			

・職場体験

「あなたは，中学・高校生の時に職場体験学習などで実際の職場に出向いた経験がありますか。あれば，すべて合計すると何日くらい行きましたか」という設問においては，「2・3日くらい」と回答する者が最も多く，全体の約41％であった。「1日くらい」「4・5日くらい」と回答する者は20％程度であり，「経験はない」という者は14％程度であった。なお，今回の対象者の多くが中学生であったと推測される2005年においては，公立中学の約92％，国立中学の約46％，私立中学の約14％が職場体験を実施していた（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター，2006）。今回の対象が大学生であるため，在籍した中学校は国公私立のいずれの可能性もあり，このような経験の状況は了解できる範囲内といえ，対象の特殊性は認められないといえるだろう。

・アルバイト

「あなたは，高校生の時にアルバイトをした経験がありますか。（なお，「長期」とは1ヶ月程度を目安とします）」という設問においては，「経験はない」と回答する者が最も多く（約69％），「日常的にしていた」者は約8％と少数であった。直接的には比較できないが，先のボランティア活動と対比すると，直接的な社会参加の経験においては，ボランティアよりもアルバイトの方が身近なものとなっているといえるのではないだろうか。

・家の手伝い

「あなたは，中学・高校生の時に家の手伝い（家事や家業の手伝い）をどれくらいしていましたか」という設問では，「たまに，頼まれればしていた」と回答する者が約半数と最も多かった。「ほとんどしなかった」と回答する者は12％程度であり，少数といえよう。多くの対象は，家庭において何らかの役割を担う機会を経験していると考えられる。

・大人同士の仕事の話

「あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人が職業や仕事について話をしているのを耳にしましたか」という設問では，「たまに，耳にした」「よく耳にしていた」と回答する者が多く，この2つの回答で全体の約77％をしめる。「ほとんど耳にしたことがない」と回答する者は10％程度であり，ほとんどの中・高校生は，何らかの機会に大人同士の仕事の話を耳にしているといえる。

・大人からの仕事の話

「あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人から，職業や仕事の意味や意義について聞かされたことがありますか」という設問では，「よく聞かされた」と回答する者は非常に少ないが（約6％），それ以外の回答には同程度の人数が該当している。「聞かされた記憶はない」および「聞かされたような気がするが，はっきりとは覚えていない」を合計すると約64％となり，聞いたことが現在でも残っているケースは半数を大きく下回る程度と考えられる。なお2012年に実施された調査（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター，2013）では，子どもと家業や自身の職業のやりがいや苦労について話し合ったとする中学生，高校生の保護者は35％程度であった。このこととも概ね符合する結果といえるだろう。

・大人からの生き方の話

「あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人から，人の生き方や人生について聞かされたことがありますか」という設問では，「よく聞かされた」と回答する者が少ないが（約10％）。他の選択肢には，比較的満遍なく回答者が分布しており，その様相は大人からの仕事の話と類似している。またこちらも「聞かされた記憶はない」および「聞かされたような気がするが，はっきりとは覚えていない」を合計すると約58％となり，聞いたことが現在でも残っているケースは

半数を下回ると考えられる。なお 2012 年に実施された調査（国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター，2013）では，子どもと自分の歩んできた人生やそこから得た教訓について話し合った中学生・高校生の保護者は 50％程度であり，ほぼ対応する結果といえる。

・大人の働いている姿

「あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人が働いている姿（家事などではなく職業に関連して働いている姿）を目にしていましたか」という設問では，「たまに見ることがあった」と回答する者が最も多く（約 45％），「日常的に見ていた」とする者が最も少なかった（約 20％）。「見たことはなかった」も約 35％であるが，ここに興味深い対象の傾向を指摘することができよう。中学校は義務教育でもあり，教員を身近な働く大人として認識していれば，少なくとも「見たことはなかった」を選択する者は 0 でもおかしくない。また近隣で買い物などもせず，地域社会との関わりを断っていたような者も少数のはずである。しかし実際の結果は以上のようなものであることから，中･高校生の身近にあるはずの多くの職業的行為は，かれらに「身近な大人の働いている姿」と認識されにくいといえるだろう。

・進路選択時の要望

「あなたが中学・高校生の時，あなたの家族や身近な大人は，あなたの進路に対する希望や要望を口にしていましたか」という設問では,「とても強く言われた」と回答する者がかなり少なく（約 7％），「少しだけ言われた」とする者が半数を超えていた（約 53％）。

次に調査対象を経験における特徴によって分類するために，生活経験 10 項目を用いてユークリッド平方距離，Ward 法によるクラスター分析を行った。デンドログラムの形状から 4 つのクラスターを抽出することを適当と判断した。それぞれのクラスターの人数，経験得点の平均値，および標準偏差を Table 3 に示す。またそれぞれのクラスターの特徴を把握しやすくするために，得点を標準化したものを Figure 1 に示す。なお，経験の各項目得点については，クラスターを要因とする 1 要因分散分析を行った結果，いずれの項目においても有意差が認められている。

Table 3 および Figure 1 に示されるように，経験クラスター 1 は，職場体験を除くいずれの項目においても経験が最も少ないという特徴がある。他方で，ほとんどの項目において経験が多い者は経験クラスター 4 に分類されているといえよう。そして，その中間的な位置にあり，また多くの項目がほぼ平均値である者が経験クラスター 2 である。経験クラスター 3 はアルバイト経験が飛び抜けて高いところに特徴があるが，他の経験に関しては経験クラスター 1 と類似して経験が少ないといえる。なお，先にも記したように，全項目においてクラスターを要因とする分散分析の結果では有意な差が認められたが，Table 3 や Figure 1 からクラスター間に相対的に大きな差異が認められる経験は，アルバイト経験と，大人同士の仕事の話や大人からの仕事の話，大人からの生き方の話といったものといえるだろう。

本分析は，経験における特徴をもとに対象者を分類しようとするものであったが，以上のクラスター分析の結果はその特徴が経験の総量ともいえる側面にあることを示唆するといえるだろう。経験クラスター 3 のみがアルバイト経験に特徴を認めることができるが，残りのクラスターを区別する特徴はほぼすべての項目における経験の多少であった。対象者を取り巻く中学高校時代環境を推測しても，ほぼすべての項目における経験が多くなる環境，少なくなる環境というものを想定することは難しい。そのため，これは客観的に観察できる現実的な経験の差ではなく，対象者の環境に対する認識によるものと考える方が適当かもしれない。

なおクラスター数の確定に関しては，以上に述べた 4 つ以外に，5 から 8 クラスターの抽出も試

Table 3　経験クラスターごとの基礎統計量

	経験クラスター１		経験クラスター２		経験クラスター３		経験クラスター４	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
ボランティア活動	1.56	0.60	1.72	0.65	1.77	0.68	1.96	0.55
進路指導・キャリア教育	2.20	0.61	2.38	0.62	2.18	0.62	2.71	0.72
職場体験	2.80	0.98	2.72	1.15	2.52	0.98	3.25	1.15
アルバイト	1.17	0.44	1.24	0.53	3.41	0.63	1.76	1.08
家の手伝い	1.96	0.66	2.58	0.89	2.29	0.84	2.69	0.89
大人同士の仕事の話	2.12	0.72	2.49	0.67	2.26	0.92	3.15	0.74
大人からの仕事の話	1.60	0.71	2.04	0.78	1.58	0.71	2.96	0.71
大人からの生き方の話	1.56	0.70	2.40	0.77	1.70	0.80	3.12	0.72
大人の働いている姿	1.43	0.58	2.16	0.62	1.57	0.64	2.10	0.74
進路選択時の要望	1.88	0.83	2.03	0.60	1.99	0.70	2.43	0.91
人数	378		338		108		313	

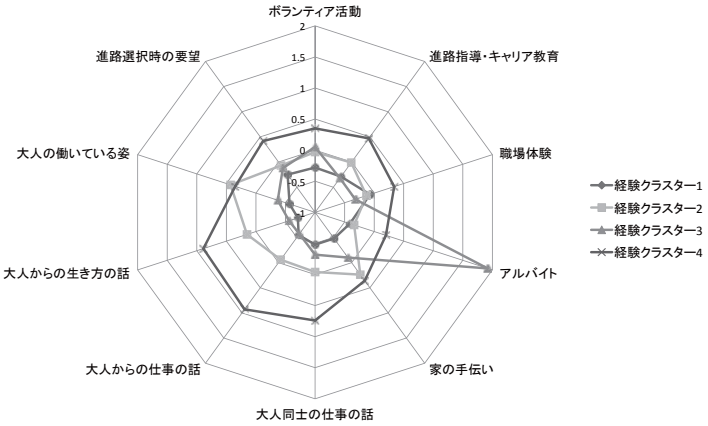

Figure 1　経験クラスターごとの経験平均値（標準化後）

みた。その中で，経験クラスター４が，アルバイト経験の多いクラスターと少ないクラスターに分かれるといったことも認められたが，やはり上記の４クラスターの下位分類の域を出ず，特筆すべき特徴を持つクラスターを抽出することはできなかった。

職業観の３側面と生活経験の関連

次に生活経験と職業観の３側面との関連を検討する。まず，各生活経験と職業観３側面の間の直接的関連を検討した。生活経験に関しては段回数の少ない設問も含まれるので，これを順序変数とみなし，それぞれの選択肢を選んだ者の職業観３側面の平均値を算出した。その値について経験の程度（選択肢）を要因とする１要因分散分析を行った。また生活経験を順序変数，職業観を連続変数とみなしたポリシリアル相関係数も併せて算出した。その結果を Table 2 に示す。

分散分析の結果は，アルバイトを除く９つの生活経験は，少なくともひとつの職業観の側面と関

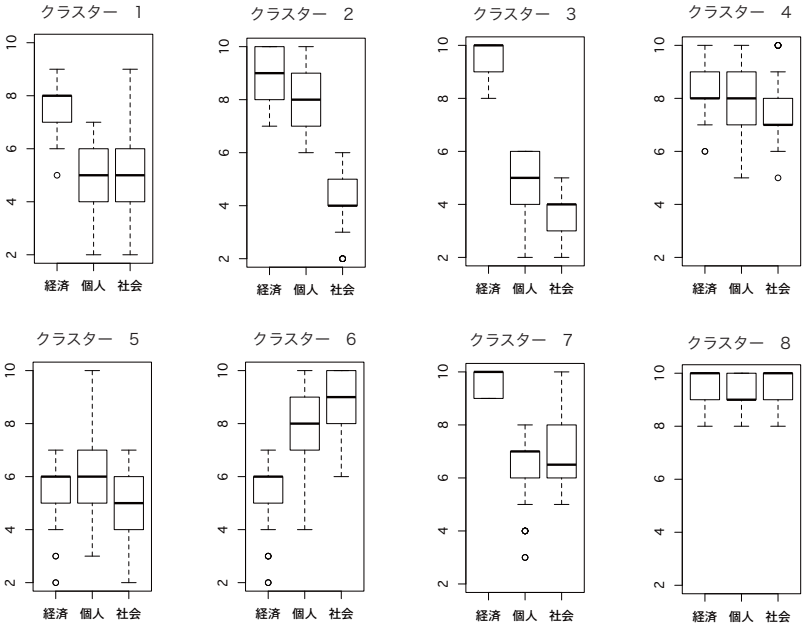

Figure 2　クラスターごとの職業観 3 側面の得点分布（浦上，2015 より）

連していることが示された。中でも，経済的側面との関連が認められたのは進路選択時の要望のみであり，残りは個人的側面と社会的側面との関連であった。ただし，職場体験は個人的側面のみで有意差が認められている。また多重比較の結果は，すべての有意差が認められたケースで，経験が多いほど職業観の値が高い，すなわちそれぞれの側面に対して重要性を認める程度が高いという差を示している。これは相関係数の符号とも整合的である。

この結果より，生活経験が豊かであるほど個人的および社会的側面で職業に価値を認める傾向が強くなるといえるだろう。しかし，群間における平均値の差や相関係数の値自体についても考慮しておかなければならない。平均値差は有意とはいえかなり小さな値であり，相関係数も極めて低い値である。そのような傾向があることは否定できないが，関連性はかなり弱いものと考えられる。

次に浦上（2015）の分析にならい，先の分析で見出された生活経験に関する 4 つのクラスターと職業観クラスターの対応関係に着目して分析を進める。職業観クラスターについては，浦上（2015）で見出されている 8 クラスターを用いる。各クラスターの職業観 3 側面の得点分布の様相を Figure 2 に示す。クラスター 1（218 名，19.2%）は，その 3 側面の得点は平均点のパターンに近いが，いずれも若干それを下回り，全体的に職業に価値を置いていない対象の集まりと考えられる。クラスター 2（79 名，7.0%）は，経済的側面および個人的側面の値が高く，社会的側面だけが低いという傾向を示す。経済的側面のみが高く他の 2 側面との差がより大きいのがクラスター 3（82 名，7.2%）である。さらに経済的側面と他の 2 側面との差がクラスター 3 ほど大きくない場合がクラスター 7（174 名，15.3%）である。クラスター 4（221 名，19.4%）は，3 側面の間での差は少なく，個人的側面および社会的側面の得点が平均点より高めである。このクラスターと同様な傾向を持ち，3 側面の得点がさらに高いという特徴を持つのがクラスター 8（129 名，11.3%）である。クラスター 5（114 名，10.0%）はすべての側面の得点が低く，いずれの側面にもあまり価値

Table 4　職業観クラスターと経験クラスターのクロス表

	経験クラスター 1	経験クラスター 2	経験クラスター 3	経験クラスター 4	合計
職業観クラスター 1	93（42.66）	64（29.36）	21（9.63）	40（18.35）	218
職業観クラスター 2	28（35.44）	20（25.32）	8（10.13）	23（29.11）	79
職業観クラスター 3	35（42.68）	25（30.49）	11（13.41）	11（13.41）	82
職業観クラスター 4	68（30.77）	65（29.41）	18（8.14）	70（31.67）	221
職業観クラスター 5	38（33.33）	37（32.46）	10（8.77）	29（25.44）	114
職業観クラスター 6	32（26.67）	32（26.67）	14（11.67）	42（35.00）	120
職業観クラスター 7	63（36.21）	51（29.31）	15（8.62）	45（25.86）	174
職業観クラスター 8	21（16.28）	44（34.11）	11（8.53）	53（41.09）	129
合計	378（33.25）	338（29.73）	108（9.50）	313（27.53）	1137

カッコ内は％
網掛け部分は残差分析の結果有意であったセル

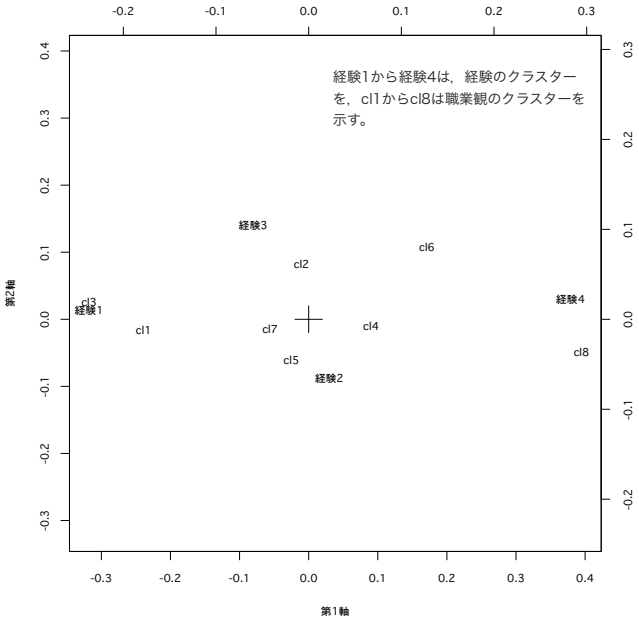

Figure 3　コレスポンデンス分析の結果

を置いていない対象者がまとまったクラスターと考えられる。クラスター 6（121 名，10.6％）は経済的側面が最も低く，それよりも個人的側面，さらにそれ以上に社会的側面に価値を置く点が特徴といえる。

以上のような職業観クラスターと経験クラスターの関連を検討する。職業観クラスターと経験クラスターのクロス表を Table 4 に示す。このクロス表に対して χ^2 検定を行ったところ，$\chi^2(21) = 51.955$ であり，1％水準で有意な偏りが認められた。さらに残差分析を行ったところ，職業観クラスター 1 と経験クラスター 1, および職業観クラスター 8 と経験クラスター 4 のセルの数が有意(5％

基準）に多く，職業観クラスター 4 と経験クラスター 1，職業観クラスター 1 と経験クラスター 4，職業観クラスター 3 と経験クラスター 4 のセルの数が有意に少ないことが示された。すなわち，相対的に経験量の多い経験クラスター 4 に分類される者は，職業観のクラスター 8 に多く，1 や 3 に少ない。また相対的に経験量の少ない経験クラスター 1 に分類される者は，職業観のクラスター 1 に多く，8 に少ないといえる。

また Table 4 に対してコレスポンデンス分析を行った。2 軸を取り出し図示したものが Figure 3 である。なお，第 1 軸の寄与率は 94.33，第 2 軸は 5.67 であり，ほぼ 1 軸で説明がなされると判断してよいだろう。第 1 軸における経験クラスターの順は，クラスター 1，3，2，4 の順であり，総体的な経験の量の少ないクラスターから多いクラスターへと並んでいると判断できる。また職業観のクラスターの順は，クラスター 3，1 が低く，クラスター 8 が高い。先の χ^2 検定と類似した結果ともいえる。

以上のような結果から，相対的に経験の少ない場合は，クラスター 3 や 1 のような職業観，多い場合はクラスター 8 のような職業観を形成する傾向があると考えてよいだろう。ただし，その中間的な経験量の場合は，残る職業観クラスターのいずれともあまり明確な関連性をもたないといえる。

考察

本研究では，尾高（1941）による職業の定義を用いて大学生の職業観を把握した浦上（2015）に従い，経済的側面，個人的側面，社会的側面の 3 つの側面に対する重要性のバランスから職業観を把握した。そして，この職業観，およびそこから導かれた 8 つの職業観タイプと，中学生，高校生の頃のどのような生活経験が関連するのかを探索することを目的とした。

まず，職業観の側面ごとに生活経験との関連を検討したところ，今回準備した生活経験項目のほとんどは，特に個人的側面や社会的側面と関連しており，経験が多くなるほど個人的側面や社会的側面に認める重要性が高まるという関連が明らかとなった。ただし，その関連は統計的に有意とはいえかなり弱いものであることが確認された。また事前の推測とは異なり，アルバイト経験をはじめ生活経験と経済的側面との関連性についてはほとんど認められなかった。

さらに職業観のクラスターと経験の関連についても検討を行ったところ，相対的に経験の少ない場合は，クラスター 3 や 1 のような職業観，多い場合はクラスター 8 のような職業観を形成する傾向があることが示唆された。ただし，その中間的な経験量の場合は，残る職業観クラスターのいずれともあまり明確な関連性をもたないといえる。

これらの結果は，特定の職業観が特定の経験パターンと関連するであろうという当初の予測とは大きく異なっている。そこで以下では，本研究の目的からは若干逸脱するが，今回の結果の解釈に留まらず，今後の研究において経験と職業観の関連について再検討を行う方向性について検討してみたい。

特定の職業観が特定の経験パターンと関連するという推測は，経験主義，また行動主義的な学習論に基づいている。すなわちある種の経験をすると，ある価値観を持ちやすくなるという学習が成立することを前提としていた。しかし今回の結果は，このような考え方を支持するものとはいいがたい。コレスポンデンス分析の結果，第 1 軸の寄与率が非常に高く，またその軸は総体的な経験の

量を示していると解釈できたことをはじめ，今回の結果は経験の総量が多くなるほど個人的側面や社会的側面に認める重要性が高まることを示している。ある種の経験の多寡ではなく，総量という経験の特徴が，個人的，社会的側面に認める重要性に影響するという関連を行動主義的な視点で論理的に説明することは難しいと考えられる。

では，他の考え方をもってこの結果を説明するとすれば，どのような論理が成立するであろうか。ひとつには，今回の研究が回想法を用いていることから，個人的，社会的側面に重要性を認めているがゆえに，関連する多様な経験が想起されやすかったと考えることができよう。この解釈は妥当なもののひとつであろうし，それを否定する根拠もない。しかし，このような解釈は職業観形成の説明としてはあまり有用ではない。あくまでも職業観は学習の結果として形成されるという立場から今回の結果を考えるならば，構成主義的な観点を持ち込むことが有用ではないだろうか。

たとえば Piaget や，それに基づく Glasersfeld（1995）によるラディカル構成主義的観点をとれば，職業観はひとつのシェマといってよいだろう。そして，それぞれの経験は職業観というシェマについての同化，調節の機会となりうる。そしてこれは順応，適応（fit）状態（均衡化）へと向かうと推測できる。これを今回の結果と対応させると，多くの経験をしている者の職業観から，個人的，社会的側面に認める重要性を高めに持つことで，多様な経験との均衡化が果たされると推測できよう。換言すれば，そのような側面を重要と認識しなければ（そのようなシェマを持たなければ），多様な経験，もしくはそれに関わる環境とのバランスがとりにくいということになる。他方で，経験が少ない場合は，個人的，社会的側面に重要性を認めない方がバランスがとりやすいと推測される。

たとえば大人同士の仕事の話は，経験クラスター間の差が相対的に大きいと考えられる経験であった。大人同士が仕事や職業に関して仕事の話をしている状況を目の前にすれば，それも相当に真剣なやり取りを頻繁に目にするようであれば，職業の個人的側面や社会的側面の重要性を高く見積らなければ，その状況に適応的にはなることは難しいだろう。なぜなら，もしそれを低く見積るようなシェマであれば，その様子に順応することが難しく，なぜそんなことをしているのかという混乱が引き起こされるため調節機能が働き，シェマの変更が不可避になると考えられるからである。中学生や高校生が職業は価値を持たないと認識するような環境，状況は少ないであろうと推測すれば，多くの経験をしている場合，各側面に重要性を認める方が適応的であり，それが本研究結果に表れているとも推測できるだろう。

本研究では，中学校・高校時代の経験と職業観の間に弱いながらも有意な関連があることが確認できた。しかしながら当初想定していた考え方では結果を十分に説明できないこととなった。そして，結果を解釈するために，構成主義の考え方を導入することを試みた。キャリアカウンセリングの場面では，すでに構成主義的観点の導入も進んでいるが，職業観の形成過程に対してもそのような考え方を導入する意義は十分にあるだろう。今後の検討が期待される。

引用文献

Glasersfeld, E. von 1995 *Radical constructivism: A way of knowing and learning*. London: The Falmer Press.（橋本渉（訳） 2012 ラディカル構成主義 NTT 出版）

広井 甫 1962 職業価値感の研究：展望と考察 職業科学，**3**，69–87.

Holland, J. L. 1985 *Making vocational choices* (2nd ed.). Englewood Cliff, NJ: Prentice-Hall.（渡辺三枝子・松本純平・

館　暁夫（訳）1991　職業選択の理論　雇用問題研究会）
国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター　2006　平成 17 年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果（概要）〈http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-ship/h17i-ship.pdf〉
国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター　2013　キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書〈http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/career-report.htm〉
Krumboltz, J.D., Mitchell, A.M., & Jones, G.B. 1976 A social learning theory of career selection. *The Counseling Psychologist*, **6**, 71–81.
尾高邦雄　1941　職業社會學　岩波書店
杉原佳奈・浦上昌則・安井彩乃　2013　どのような生活経験が大学生の職業観に影響するのか　日本心理学会第 77 回大会発表論文集，190.
梅澤　正　2008　職業とはなにか　講談社現代新書
浦上昌則　2008　下村・白井・川崎・若松・安達論文へのコメント―「社会」という言葉に着目して―　青年心理学研究，**20**，101–108.
浦上昌則　2010　キャリア教育へのセカンド・オピニオン　北大路書房
浦上昌則　2015　大学生の職業観と職業不決断―尾高（1941）による職業の定義に基づいた職業観の把握―　アカデミア（人文自然科学編），**9**，41–56.
山下恒男・道脇正夫　1973　職業的行動の発達的研究（3）―職業概念の形成―　日本教育心理学会総会発表論文集，**15**，186–187.